

特249

50

706

309

神精本日と學文本日

作 村 藤

會 更 新



始



3

7

持249  
309



日本文學と日本精神

文學博士

藤

村

作







## 日本文學と日本精神

文學博士 藤村 作

明治以來、我が國領土の擴大、その勢力範圍の擴張は實に目覚ましいものである。先づ日清戰爭の收穫としての臺灣、日露戰爭のそのの關東洲、樺太、それに引續いての朝鮮の併合、それから世界大戰爭の收穫としての南洋群島、最後の滿洲事變の結果としての滿洲帝國に於ける勢力範圍の擴張、これらは我が國力の非常なる發展を意味するもので、實に國家の爲に喜ばしいことである。

更に一方に在つては、いかに世界大戰後の歐洲諸國の弱つてゐる際であるとはいへ、世界の列強が我國の主張を如何ともし得ないものがあり、又我が國產品の世界各地への進出があつて、今や我が國は、世界に於ける、嚴然たる一大強國である。

さて、日清、日露の戰爭も、世界大戰爭への参加も、我が國としては、それ／＼に立派な理由、主張を持つてゐることは、その時々々の開戦の詔勅に依つて明かである。なほ又我が國の領土に對して、又極めて密接なる關係を有つ附近に對しての、強大なる外力の壓迫に堪へ難いとするところの理由は、國家の危險を感ずるばかりでなく、年々増加して行く百萬近くの人口のはげ口を求める必要に迫られてゐる爲でもある。この爲には國力を賭



しても争はねばならなかつたことも明かである。

かうして、領土、勢力範囲の擴大して行くことは、國家の爲に喜ばしいことであるが、これに精神的、文化的に世界開發の意義がなければ、單に國家、國民の利己心を満足せしめる爲の侵略と同一視されるやうになつて感心が出來ない。國家的、國民的であつても、利己心はやはり利己心である以上、それに終始することは、個人に在つて感心の出來ないやうに、國家、國民に在つても同様である。

領土や勢力範囲の擴大には、必然的に精神的文化的の擴充が伴ふといへば、いへるであらうが、さういふ自信、さういふ意識を持つてなすのと、持たずになすのでは、同様のことも、その意氣込に於ても大に違ふ。無意義の戦争に志氣の揮はないと同様である。日清戦争は、西洋の文化を輸入し模倣してゐた東洋の二國民が、西洋の武器で戦つて、その多く學び得てゐた日本が、その少く學び得て得た清國に打勝つたのだといふだけでは、我々としてもその勝利に多くの誇りを持ち得ない。又日露戦争は、西洋文化を輸入模倣した我が國が、その本家本元の一國に對して、西洋の文化に本づく武器で戦つて、これに打勝つたといふだけでは、やはり餘り多くの誇りとはなり得ない。この兩度の戦争に於ける我が國の勝利の根柢には、我が民族、國民の持つてゐる本來の特殊なる精神があり、それが、西洋文化を利用し、西洋の武器を利用して得た勝利だといふところに、我々に大なる誇りがあり、我々としてこの二戦争に大に意義を感じるのである。この點は、この勝利あつて間もなく西洋人も氣づき始めたのであつて、今日に於ては世界の識者は日本精神の尊ぶべく、恐るべきを解してゐるやうである。

我が國の過去はかくの如くである以上、將來も亦同様に世界的に擴大、擴張を続けるであらうと推測すること

は決して無理ではあるまい。しかしながら、その擴大、擴張の背後には、常に日本精神、日本文化が無ければならない。國家の發展はやがてそれが日本特有の精神の世界的擴充、日本特有の文化の世界的擴張でなければならぬ。これでこそ日本の世界的進出に本當の意義が存すると思ふ。如何に非常であつても、軍事費多端の時であつても、精神的、文化的の發展、それに關する事業に怠つてはならない。

そこで、この日本の世界的進出、發展の根柢となるべき日本精神であるが、これをよく知り、その長所短所をよく知つて、特にその長所を伸ばして行くことが、我々に取つて極めて重要であるが、これをどうしてよく知ることが出來ようか。これを過去の歴史に探り、これを現在に就いて眺めるのも一方法であるし、又これを日本人についてよく見るのも、又これを外人と比較して見るのも、亦一方法である。が余は過去三千年の歴史中で、國家、國民の發展の上から見て、最も重大な事件、事業を成就した蹟について、よく觀察し、その大事業の根柢に活動してゐる精神を探り出せば、これは少くとも日本國、日本國民の過去の發展に重要な精神であつたことが考へられる。さうしてそれから推考してそれは將來に於ても亦日本國、日本國民の發展に重要な精神であるといふことが出來よう。

日本の歴史中に於て、國家、國民の發展の上から見て、最も重大であつた事業は、これを孝徳天皇時代の大化改新と、明治天皇時代の明治維新とすることが出來よう。ところが、この二大改新事業の根柢に存在する精神を考へて見ると、恰も符節を合するが如きものゝあるのを見出す。即ち二つの精神がこの二大事業を起して又これに成功してゐる。その二大精神といふのは、一つは建國當初の精神に立ち復らうとするの精神であり、又一つは



時代の變化に應じて、環境の變化に適應し、且つ從來未だ所有しなかつたものを攝取し、消化せんとしたところの精神である。即ち前者は時代の變化の爲に、一時天皇親政のことが、特殊な事情に阻まれて十分に行はれ難くなつて、長い年月を経て來たのを、再び元の相に立ち復らせようとしてゐるのであり、又後者は外國との交通が新しく開けて、その精神、その文化に接觸するやうになるや、直ちにその長所を取つてこれを攝取し、或は制度に、或は社會に、或は學問思想に、或は文藝にこれを取り入れて、各方面の更新發展に資せんとするの精神が盛んであつたのである。

この二つの精神は、我が國家、國民の發展の根柢となるものであるから、これは將來に長く傳へることが必要であることは言ふまでもない。それには、これについて國民の自覺が肝要であり、自覺と共にこれを倍々盛んにもし益々磨いても行かねばならぬ。

この精神は、國民性に根ざしてゐること勿論で、今これを崇本性と融化性と名づけておく。崇本性は日本精神の種々な形相になつて表れてゐる。さうして、それは國民のさながらなる影像といはれる國文學の上によく表れてゐる。

(一) 第一に擧ぐべきは上代文學によく見え、それから後の各時代の文學にも見えてゐる。神の信仰、尊崇である。これは先づ我が最古の文學たる口誦の文學に見られる。古事記、日本書紀などの神話傳説、歌謡の中に在り、祝詞にも勿論ある。この神、八百萬の神々には、絶對神もあり、自然神もあり、人格神もある。宇宙を創造された天之御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の如きは絶對神であり、日月、山川、海洋等の神々の如きは自然

神であり、皇室の御祖先としての天照皇大神を始め奉り、氏族の祖先たる神々は人格神である。この人格神の中には單に祖先として崇められるものと、英雄の如き偉大なる人格の爲に崇められるものとあるが、多くはこの二つが一緒になつてゐるやうである。

これらの神々は、多くは産むといふ「はたらき」に由つて次々に出現せられたものと神話に語られてゐる。さうしてそれ／＼に何かの本源となつてゐる。宇宙、日本國家、日本皇室、日本國民、その中の或氏族といふやうなもの、それ／＼の本源となつてゐる。であるから、この敬神の精神ももと本源を尊崇する國民性に出てゐるといふことが出来よう。その一筋ではないにしても、この性格が最も力強いものである。

これが上代の歌謡に語はれてゐるものは、比較的によく傳はつてゐない。神樂歌も直接に神徳を讚美し、神恩を感謝した内容を持つもの、即ち耶蘇教の讚美歌のやうなものは少い。寧ろ唯信仰を歌つたものが多い。それも間接的な表し方である。祝詞は神を祭る祭祀の際に讀上げられたものであるから、これには常に神に對する讚辭が述べてある。さうして更に祈願をも奉つてある。勅撰集の神祇部は固より敬神の精神の直接間接の表現である。中世時代以降の文學にも、主題としたものは、神祇の歌位に過ぎぬとしても、大きな形の文學中には、例へば軍記、物語、小説、戯曲などの中には、趣向の一部分としてはこの精神の表現は隨所に在る。軍記中に武士が神靈の加護に由つて勝利を得、名譽を揚げんとするが如き、物語中に或神の救ひに依つて危難を免れ、幸福を得るが如き、敵討つものが、神靈の御導きに由つて敵と逢ふが如きこれである。

(二) 次は忠君愛國であるが、これは國民の崇本性が國家に即して發動したところの精神である。我が國に在



つては、忠君と愛國とは二にして一である。忠君であつて愛國でないものはあり得ない。愛國であつて忠君でないものがあるとするならば、又それは誤つた愛國であらねばならぬ。國民の意識の上に表れてゐたところの著しいのと、著しくないのとは、時代に由つて色々あるが、斷えず形をかへて、この精神の存することは明かである。古事記、日本書記の叙述は、宇宙の創造に始まつて、日本の國家的統一、それから國家的發展をば皇位、皇室を中心となされたものであるから、その中には幾多の忠君、愛國の精神を見出すのである。併し忠君は皇室が國家統一の中心であらせられるのであるから、常に明かに出てゐるが、愛國は外國との交渉の少い時代であるから、自然に外に現れることが少い。これは平安朝以降の文學にはもつと甚だしい現象である。その忠君の精神にしても、時代の特殊なる相に應じてかはつて表れてゐる。平安時代の文學は、官廷に奉仕した貴族の文學である。彼等の皇室に對して持つてゐた思想感情に至るところに表れてゐる。それが、平安文學の一特徴であるといへる。しかし、その表れは今日の吾人の表れとは同様でないから、一寸見ると彼等の忠誠が疑はれるやうでもあるが、併しそれは彼等の社會的の特殊な立場、特に皇室との特殊なる關係とを、よく考慮の中に入れて考へて見れば、忠君の精神、皇室に對する忠誠の、一つの表れ方であることは首肯されるのである。

武家時代の文學に於て、忠君の精神の著しい表現を見るのは、やはり建武の動亂時代に體驗を持つた人の手に成つた神皇正統記、新葉集の歌の如きものである。これらはその作者の特殊な立場と、動亂の爲に觸發されて、強く表れたのであることは明かである。が一方には、保元の亂に於て義朝がその父爲義を殺したことを叙したところに、著者は

中にも義朝に父を斬らせられし事、前代未聞の儀にあらすや、且は朝家の御誤、且は其の身の不覺なり、背き難き勅命に依つて、是を誅せば、忠とやせん、信とやせん、若し忠なりといはゞ、忠臣をば孝子の門に求むといへり。若し又信といはゞ、信をば義に近くせよといへり。義に背いて何ぞ忠信に従はん、(中略)孝をば父にとり、忠をば君にとり、若し忠を面にして父を殺さんは、不孝の大道、不義の至極なり。(中略)誠に助けんと思はん、などか其の道なかるべき、恩賞に申し替ふるとも、縦ひ我が身を捨つるとも、争でか是を救はざらん。他人に仰せ附けられんには力なき次第なり。誠に義に背ける故にや、無双の大忠なりしかども、異なる勳賞もなく、結句幾程なくして、身を乞しけるこそあましましけれ。

といつてゐる。これは忠孝兩全の理想からすれば尤もなことである。これを萬葉の「海ゆかば水づく屍、山行かば草むす屍」と謡つたものに比べると、弱いやうではあるが、萬葉時代の人々にも、防人となつて遠地に行く人達の忠誠に疑を容るゝところはないが、しかし家を離れ行き、父母妻子にわかるゝ悲痛の涙はあつたのであるから、かうしたものが人間の至情であらう。さうして一方的でない、心の全貌が窺れるのであらう。平家物語、源平盛衰記に見えてゐる、重盛の忠孝兩全の道に迷つたところの叙述にも亦同様な精神が見えてゐる。日本の大道からいへばそれは柄としてゐるにしても、當時代の日本人にかうした迷も實際にはあつたといふことは、人間的立場から見てもよく理解される。さうして日本精神の時代々々に於ける表れとして、文學はよくこれを我等に教へる。

江戸時代文學にも、國學者の文章や和歌にこの精神の見えるのは言ふまでもなく、俗文學の中にも馬琴の



作品の中には見えるものがある。弓張月、俊寛僧都鳥物語に在る。併し、一般に甚だ稀薄であることは確かである。これは本時代純文學は平民の文學であつて、その平民階級の立場は極めて低い、商工民であつたので已むを得ない。

武士時代を通じて、文學精神として最も著しいのは、忠君のかはりに主従間の忠義がある。これこそは實に武士時代文學の主想の第一である。この精神は忠君と全く同一のものではないが、崇本性の一つの表れといふことは出来る。主従結合の基礎は物質と精神の兩方面に在つた。物質的には食祿の授受であり、精神的には相互の間の愛と尊敬であつた。この精神は主従結合の當初に於ては、個人と個人の間のものであつたらうが、重代の關係になると、家の觀念と結びついて、その本を尊ぶ精神が強く働くことになつてゐる。先祖をいふことの多かつたのもこの爲である。即ち武士主従は家と家との關係であり、その家は皆祖先から傳へられて、その關係を重ねてゐるといふところに、忠誠の感情を強めてゐたのである。かやうに武士の忠義は、國民の忠君と崇本性に本づく點に於て一致する。江戸時代の末期に於て、我が國狀が外國の刺激に由つて急變して來ると、長い鎖國から目覺めて、外國意識が高まると共に、愛國の熱情も高まつた。かくして當時の歌人、非歌人の和歌に、遽に忠君愛國の精神が歌はれた。さうして更に明治に入つて、政治運動が起ると、政治の對象は國家國民であるところから、又國家意識が大に盛んになつて、經國美談、佳人之奇遇等の愛國文學を見た。

以上の外、家族制の根柢をなしてゐる精神、その家族制から生じた精神が歴代の文學中に見えてゐる。古くは萬葉の歌に見えてゐる家乃至家柄を尊重する精神、例へば大伴家持の大伴の家柄に對する愛重の精神は……

大伴の遠つ神祖の奥津城はしるくしためて人の知るべく

劍太刀いよとぐべし古ゆさやけくおひて來にしその名ぞ

などに見えるところである。

平安時代文學では、貴族の權榮が皇室との血族的關係を中心として移動してゐたのであるから、家柄の尊重はその意味に於てなされてゐた。それであるから、藤原氏の如き氏族の家の誇りよりは、その時代に於ける皇室との血族關係を中心とするやうになつてをり、それが歴史物語や作り物語に見えてゐる。

武家時代の文學に於ては、武士はもと貴族と違つて地方に住んだものであるから、家柄の誇るべきものが明かでなかつたのである。それでも、家系の尊重は彼等にもあつたので、彼の軍記物に於て、戰場に於ける名乗りとなつて「清和天皇何代の後胤何の某」といふやうな風になつてゐるのである。江戸の平民文學中でも、武士を取扱つたものであると、この精神はよく續いて表れてゐる。御家騒動物に於ける家寶の問題はよくそれを示してゐる。

なほ又崇本性から出た精神の一として、傳統の尊重がある。これはあらゆるものゝ上に見られる精神である。衣食住の上について見ても、固より時代々々に變遷はあるが、それは時代環境に應じての變化である。さうしてさうした變遷の中にやはり傳統の尊重がはつきり見られるのである。建築にしても、支那印度の文化の入るに伴うて外國の様式が入つて來たが、神社の如きはその最も簡易なる大昔のまゝの様式が傳へられて、今日の我々の目の前に在るのである。衣服も隨分變遷はしてゐるが、宮廷と神社とは昔のまゝのものが尊重され保存されて



ゐる。和歌の形式の如き何故に三十一字形がかくも古今を通じて勢力を得てゐるか。色々學者の研究もあるが、傳統尊重のことを措いては考へられないことであらう。十七字の俳句形式にしても同様である。その他雅樂、能樂、狂言、歌舞伎、淨瑠璃、よくも古典的藝術が傳へられ、茶道、花道が今日の生活中に取り入れられてゐるが如きも傳統の尊重に他ならぬ現象である。これらの中には随分愚にもつかぬことまで、傳統なるが故にのみ殘存してゐるものがある。所謂古い格式が、今日では殆ど無意味に殘されてゐるのである。それ／＼の道の故實の類がそれである。

崇本性に本づく精神はまだ他にもあるが、まづこれに止めておく。崇本は本に復るの精神ともなる。行詰つた時代には復古に更新の道が見出されて來たのであるが、一般にいへば、こゝに日本人の保守的傾向がある。

次は融化性を元とする精神である。これは從來我が國の持たなかつた、外來の精神、外來の文化を攝取し、これを我に融化する精神である。外來精神のまゝ、直譯的に存するものもあるが、既に融化を遂げて新しい相を持つ、新しい精神として、文學中に表れてゐる。故にこの中には、單なる模倣でない、日本的なるもの、創造を認めるのである。

本來我が國民の融化性といふのは、我が國民は外國、外國文化、精神に對しては甚だ寛宏であつて、濫りにこれを毛嫌ひし、排斥することをしない國民である。上古亞細亞大陸の交通が開けて、漢魏六朝の文化が、朝鮮を経て輸入され、次いで隋唐の文化が輸入されて、我が王朝時代文化の素材となつて、こゝに從來の日本文化と違ひ、又外國のまゝでもない、特色の多い王朝文化が創造されたのである。外國文化の中で最も多く内面的の影響

をなしたものは佛教であつたが、その悲觀的、厭世的な人生觀は、我が國民本來の樂天的、現實的思想と、容易に相容れ難いものであるから、これを我に融化せしむるまでには、固より相當の年月を必要として平安時代以後に至つて、國文學の内容たる主要精神の一となつてゐる。これは固より實生活の上でもさうであつたのである。

例へば平家物語を見れば、その敘述の根柢をなしてゐる人生觀は、佛教的なる人生觀である。この人生觀の根柢の上に、平家方の人物の代表する從來の貴族精神、貴族文化と、源氏方の人物の代表する武士精神を統一してゐるところに、本書の斷片的なるが如くして、一篇の叙事詩を成すとされる所以がある。廣く戰記物を見ても、幸若舞を見ても、謡曲を見ても、又は歌論、能樂論を見ても、老莊儒佛の思想の含まれるのを見るが、それらは原の思想のまゝに混じてゐるのではなくして、それが融化され、新に創造されて日本の武士道の形で文學精神となり、日本の歌論となり、日本の能樂論ともなり、又それ／＼の文藝ともなつてゐる。即ち趣味化し、生活化してゐるところに、日本の創造の著しいことを見出すのである。

更に近世以降つて見ると、思想的には同様に從來の國民精神に、外來精神を要素としたものと見られる。即ち儒佛老莊と本來の日本精神とに分解されるが、その特徴はそれが社會生活、家庭生活の上に纏められて、義理といふ社會規範となつてゐるところに在る。さうして本時代文學の文學精神の最も主なもの、實にこの義理である。

更に明治時代に入つては、從來の鎖國から開國となつて、歐米諸國の強大なる力と、燦然たる文化とに接して、先づ驚異の目を開いて、在來の國力のまゝでは彼等の間に伍することは出来ない、従つて國家の存在が危いこと



を知つた。さうして、かういふ立場を脱して、安全なる地位を得るには、先づ彼等の國力の基礎となつてゐる制度文物を移し、これを學ばねばならぬと認めて、盛んにこれを實行して、爾來六十年、殆んど腦目もふらぬほどであつたから、在來の學問の外に科學を學び取り、在來の東洋文化の上に、西洋の科學文化を取り入れて、今や盛んにその融化に力めつゝあるのである。今我々の生活を省みれば、なほ東西内外の對立するものがある。その爲の鬭争も色々の方面に在る。かゝる鬭争の間に自然に融合の行はれつゝあるのであるが、又そこに我々の創造もなされつゝある筈である。文學の上に於ては、新舊の明かな對立を明治年間に見たのである。即ち美妙、二葉亭、嵯峨の屋、下つて「文學界」同人等の新派と、箕村綠雨等の舊派とは對立してゐた。然るに自然にその中間に立つ紅葉露伴等の多くの作者も出で、新舊の融合は自然に行はれて來た。更に自然主義を経た今日では、非常に面目を新にしてはゐるが、こゝに融合創造の成されつゝあるには相違ないと信ずる。大きな眼を以て、離れて見る便を有するならば、蓋し今の時代は東西、新舊を基礎とした、日本的なる文學の創造時代であらう。

かやうに、常に機會ある毎に外なるもの、未だ得ざりしものから、多くのものを攝取し、融合し、日本的なるものゝ創造を成すところについて見れば、日本人は常に進歩的であり、生長的である。

更に言葉及び表現に就いて見るに、古事記、祝詞の文には、純粹な大和言葉と大和言葉的なる表現のみから出來たことを見るが、(尤も祝詞中に漢文のものが一つある)萬葉集の歌になると、稀には漢語及び漢文的表現が混じてをり、題や序には漢文を用ひたものがある。平安時代の文學には、純國語及び純國語的表現の最高峰であるが、それでも時に漢語を用ひ、漢文的表現の移植されたものを見る。近古時代に至つて大に文體の變化を見るに

至つたのは、外來文化の輸入消化の爲に、語彙に於て漢語を入れて豊富となり、文の相あひあひに於ては、漢文の表現法を入れて、剛健華麗になつて來てゐる。軍記物語の文章の面白さは、柔艶なる國語、國文學と、剛健麗華なる漢文學のよく調和してゐる爲であるといへる。さうして一種の考調の美の存するのは、語り物たる爲でもあるが、又支那の四六體を取入れてゐる爲でもある。謡曲文の如きは、特殊なる風致を存するものとして知られるが、その文學は和漢儒佛の要素を豊富に持つて、それを目も眩むやうに織り交ぜた絢爛さに在るのである。その爲に櫻の錦をいはれ、詞藻に役せられた拙さを指摘する人もあるけれども、又一種華麗濃艶の文體の美を持つことは否定し難いものである。かくの如く、近古文は外來の詞、表現の要素に負ふところが多い。

近世になると、近古のこの流れを追ふものが多い。固より一方には、擬古文が流行して、純國文を用ひたものもあるが、本時代を代表する文學は、和漢の混融したところに只管、文章の美を求めてゐる。文豪といはれる近松の妙文の難解な事は、その用語、修辭が漢文學、佛典から多く入つてゐる爲である、馬琴は明らかに支那文學を採した人であるから、その趣向は勿論、その文學にも漢文の影響の尤も著しい人である。俳諧の二大時期を代表する元祿の芭蕉、天明の蕪村に於ける漢文學の影響は一通りのものでない。更に俳文に至ると、又甚だしいものがある。

明治以後の文學に至つては、いふまでもない。翻譯されたる外國語、外國語のままの外國語及び外國文的なる表現、さうしたものを拾つたら、恐らくそれに勝へられないほどである。現代文學の發展を見るものは、これを外國文學と併せて研究しないことには、その真相を究め難いのである。



かく、言葉や表現の上から見ても、日本文學は一面からすれば、惜しみなく外國文學を取り入れて、これを融  
化し、その上に創造をなしてゐることを見るのである。

我々は過去を省みて、將來の計畫を立てることが最も肝要である。さうすれば、右に述べた如く、過去に於て  
は、我が國家國民の發展は崇本性に本づく諸精神と、融化性、創造性に基づいて外來精神の融化創造に努めるこ  
とが我々の將來を大にする所以であると信ずる。さうして同時に日本精神には不斷の創造があつて、成長已まさ  
るものであると信ずる。この日本精神の不斷の成長、不斷の創造に努力するのが、取りもなほさず、日本人自己、  
日本國に我々の最も忠實なる所以と信ずる。

さうして、この日本精神の本體となる上代の純日本的なるものから、時代を逐うて生長、創造を續けて來たと  
ころの眞の日本精神を把握するには、日本文學を見るよりよいことはない。これ我々國文學者の國家に負ふ最大  
の任務であるのである。

昭和十一年一月八日印刷  
昭和十一年一月十日發行  
新更論集分冊  
定價金十錢

編輯兼  
發行者  
神 崎 照 惠  
千葉縣成田町一番地

印刷者  
宮 内 利 平  
東京市京橋區寶町  
二丁目七番地

發 兌  
千葉縣成田町一番地  
新更會刊行部



終

10  
6